な時間の外は、全く讀書を廢してゐるやうな次第です。 事が出來ません。それに此の一週間は、電車に乘つてゐる僅 へ歸る時は、いつも夜の十一時。十二時で、原稿も手紙

0 したので、とうく のは、多分夜の八時頃にもなりませうか。こんな次第で、 て、當日は朝の六時までに、 原稿が切時間たる月の中旬を、一向落ちつく折もなく過しま 十八日に芝の増上寺で御葬儀があります。 「みづゑ」のも間に合はなかつたのです。 お邸へまるります。 私は接待掛の役割 御埋棺を終る

要領を得た記述で、新説といふものでもありませんが『みづゑ』 の讀者諸君に、 「繪畫美學」と題して連載します。 ウイルヤム・ナイト氏の『美の哲學』と題した上下二册の中、下 「繪畵論」な抄譯しようと思ってゐるのです。極く平易な、 多少とも参考になれば結構です。 四月號から必

思ってゐます、今日にもに行って、 刻も、實物が三個來てゐるそうですから、 ですが、時間 赤阪の三會堂で『白樺』 の都合が惡いので、其れも出來かねます。 』主催の展覽會があります。ロダンの彫 感想を書いてさし上げ 是非見に行きたいと

ぞ惡しからず。八二月十六日 寸お伦びと存じ、くだら以事を書いてしまひました。 何ら

下藤次郎氏の繪 日記

記から、 と解らぬ、 に見せるためでなく、 ことがあるが、その外は何も書いてないのが多い、ツマリ、 外の植物などを、寫生した傍に、その名や、色彩を註してある 繪ばかり、之れも粗末なナモ帖に、鉛筆で至極あつさり、 ず日記をつけたり、 こんなものが出來た。 つと面白いのがあるのだ、 人物なども、同君には誰といふことが解つてゐて、他人が見る ッチがして、 故大下君は、至つて丹念な人で、 遺稿として本誌に出したことがあるが、日記に至つては、 五枚ばかり切り取つて、寫真版にして掲げて置く、も その日記は十數冊あるが、こゝに三十九年四月の日 日附があるばかり、どうかすると、目を惹 紀行文を書いたりしてゐる、 自分一人の憶ひ出の種にしたのらしい、 四月といふ月に重きを置いたので、 あの忙がしい最中に、 紀行文は歿後 缺かさ スケ

非 人情 0 記

(STANOO) (STANOO)

幸

雄

何だと問はれたら、河ですと答へ度い様な道を、 い加減にして、出來る丈元氣の出る樣な話をしながら、歩いた。 三に歩いた、今は菅笠の恥しさも、建さんの身體の心配も、よ 降りしきる雨 の中を、 心細そうな建さんを引張つて、 幾度か倒れさ 無